



子どもは主体的な学び手

園長 和島 千佳子

先月、保護者の方とお話の中で、弁当の話題になりました。幼稚園では家庭から弁当を持参していただいていますので、それぞれ違うものを同じ場で食べることになります。友達が食べている様子を見て、自分が食べたことのない食材に興味を持ち、家庭で「〇〇を食べてみたい」と話そうございます。それを聞いた保護者の方は、そういえばまだ食べさせたことがなかった（食材、調理法）と思い用意して、一緒においしく食べ、親子共々食の楽しみが広がっているというお話でした。

園では感染症対策として、食事は静かに食べることが続いています。皆で簡単な調理をして食べることもまだ再開が難しい状況です。感染症から身を守る必要を考えつつ、残念さもあつたのですが、私はこのお話を聞いて、子どもの「自ら学ぶ力」を頼もしく思いました。同時に、園という、友達と一緒に過ごす場のもつ教育力を感じ、勇気づけられました。友達とおしゃべりを楽しみながら食事することが叶わなくても、園で友達と一緒に食べることから、子どもはちゃんと自分の学びを得ているのですね。

「自ら育つものを育てようとする心、それが育ての心である。」

これは、大正～昭和初期の時代から幼児教育の重要性を説き、日本の保育や幼児教育の礎を築いた倉橋惣三の言葉です。

今、幼稚園では、ゆり組(5歳児)は、サイコロケンケンと名付けた遊びを「面白い、やりたい」と友達と繰り返す中で、片足跳びの動きが洗練され、それに伴いルールも変化させながら遊び込んでいます。また、園での栽培の経験から種の変化や生長に興味をもち、「知りたい、育てたい」と考え、調べ、家庭からも様々な種を持ってきています。

もも組(4歳児)は、作って遊ぶことを楽しんでいます。年長児や友達の作ったものを見て「欲しい、作りたい」と空き箱やカップなどの材料を選び、自分なりに考え工夫しながら作り、嬉しそうに遊んでいます。

先ほどの倉橋の言葉は、次のように続きます。

「世にこんな楽しい心があるうか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものとの、互いの結びつきに於て相楽んでいる心である。～中略～ 斯うも自ら育とうとするものを前にして、育てずにはいられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である。それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。～後略」

私たち大人は、子どもたちとの生活の中で、子どもの「自ら学ぶ姿」を捉え、大切に育てようとし、同時に、そのことにより、関わる大人自身も育てられているのだと実感する場面が様々にあります。主体的な学び手である子どもたちの傍らで、私たちもまた、自ら学ぶ存在として、共に過ごしていきたいという思いを新たにします。



サイコロケンケン(5歳児)



いろいろな種 集めています(5歳児)



わたしのネコ(4歳児)